

胸部大動脈瘤外科治療とその危険因子に関する統計学的解析

著者	藤岡 重一
雑誌名	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
巻	平成2年7月
ページ	6
発行年	1990-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/14757

学位授与番号	医博甲第911号
学位授与年月日	平成元年6月30日
氏名	藤岡重一
学位論文題目	胸部大動脈瘤外科治療とその危険因子に関する統計学的解析

論文審査委員	主査	岩	喬
	副査	橋本	和夫
		宮崎	逸夫

内容の要旨および審査の結果の要旨

胸部大動脈瘤の手術は心臓大血管手術の中でなお困難な手術の一つである。今回胸部大動脈瘤の手術成績に影響を及ぼす諸因子について統計学的方法をもって臨床的検討を行なった。対象は1973年から1988年3月までに当教室で外科治療を施行した胸部大動脈瘤79例である。男性60例、女性19例で年齢は26歳から73歳、平均53.8歳であった。病型分類では解離性大動脈瘤47例（DeBakeyⅠ型14例、Ⅱ型4例、Ⅲ型29例）、真性胸部大動脈瘤32例（上行・弓部大動脈瘤15例、下行・胸腹部大動脈瘤17例）である。24時間以内の早期死亡は11例にみられその原因は出血6例（54.5%）、低心拍出量症候群5例（45.5%）であった。全症例79例中手術後1ヶ月以内の早期死亡は16例であり、1ヶ月生存率は79.7%、1年生存率は74.3%、3年生存率、5年生存率はともに72.7%、10年生存率は58.7%であった。全症例79例および1ヶ月以内の早期死亡を除いた63例の症例の生存率をそれぞれKaplan-Meier法にて算出した。外科治療結果に関与する危険因子として性別、年齢、解離の有無、Marfan症候群、糖尿病、術前血清クレアチニン（Cr）値、高血圧、病型分類（DeBakeyⅠ、Ⅱ、Ⅲ型、上行・弓部、下行・胸腹部）、手術部位（上行・弓部、下行・胸腹部）、手術術式（人工血管置換、extraanatomic bypass、パッチ閉鎖等）、補助手段（なし、体外循環、バイパス）、術中出血量、手術時間、大動脈遮断時間、術後腎不全、再手術の16項目をとりあげ、手術後の生存率について項目別に統計学的検討をくわえた。各項目ごとに一変量解析（generalized Wilcoxon検定およびKruskal-Wallis検定）および多変量解析（Cox proportional hazard model）を行った。全症例でみた場合、一変量解析では術前血清Cr値（ $p < 0.05$ ）、術中出血量（ $p < 0.01$ ）、手術時間（ $p < 0.01$ ）が有意であった。多変量解析では手術術式（ $p < 0.01$ ）、補助手段（ $p < 0.01$ ）、術前血清Cr値（ $p < 0.05$ ）、手術時間（ $p < 0.05$ ）が有意であった。一方1ヶ月以内の早期死亡を除いた耐術者でみた場合、一変量解析、多変量解析ともいずれの項目でも有意ではなかった。術後の合併症で手術結果に直接影響を与える因子として術後腎機能障害、中枢神経障害、感染症が重要であった。

以上、本研究は臨床手術の予後調査、危険因子の解析に従来とは異なり近代的な統計学的方法を用いて検討したもので胸部外科学上意義ある労作と評価された。